

飛鳥地域の発掘調査

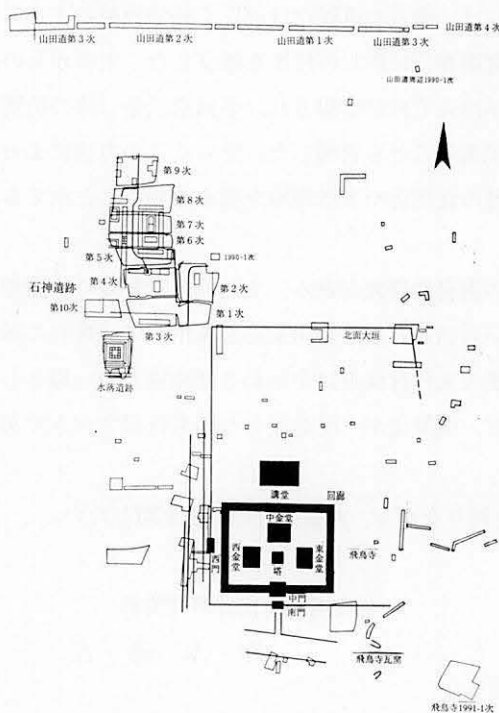
飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1991年度に飛鳥地域において実施した石神遺跡・坂田寺・飛鳥池遺跡の調査概要を報告する(10頁の一覧参照)。

1. 石神遺跡第10次調査

遺構 今年度から旧飛鳥小学校の敷地(小字唐木)を調査する予定となった。今回の調査地は第3次調査区の西、史跡水落遺跡の北にあたる。検出した遺構は、大きくA期(7世紀中頃:斉明朝)、B期(7世紀後半:天武朝)、C期(7世紀末~8世紀初頭:藤原宮期)にわかれる。

[A期] 飛鳥寺の北に東西大垣SA600が作られ、その北側に石神遺跡(斉明朝の饗宴施設)、南側に水落遺跡(斉明六年<660>に中大兄皇子がつくった漏刻台=水時計)が形成された時期。SA600は低い基壇をもつ掘立柱の一本柱塀で、第3次調査区で約45m分を検出していた。今回、調査区の東側でその西延長部の柱掘形を4箇所検出した。このSA600の西端の柱穴から西へ約7.5mの間に柱穴はないが、その西側でSA600と方位を揃え、柱間寸法も同じ2.54m等間である東西塀SA1600を7間分検出した。SA600とSA1600は掘形の大きさや柱の径がわずかに異なるものの、一連の計画にもとづき造営された大垣とみられる。しかし、その間に柱穴はなく、この間は両遺跡を結ぶ通路として利用されたと考えられる。したがって、今回検出したA期の遺構は、1)東西大垣の南に広がる水落遺跡に属す遺構、2)水落遺跡と石神遺跡を結ぶ遺構、3)東西大垣の北に広がる石神遺跡に属す遺構、にわけられる。



飛鳥地域調査位置図(1:8,000)

1. 水落遺跡に属す遺構 SA1600の基壇南縁を限り西へ流れる石組溝SD1601と、その南に広がる石敷SX1630がある。SD1601は、底幅40~50cmの溝に復原できる。側石はほとんど失われているが、基壇南縁を画す玉石が溝の北の側石を兼ねた構造となろう。SX1630の石の敷き方は、石神遺跡側の石敷SX1590・1645・1655にくらべ丁寧で、石も全体に小型である。

2. 水落遺跡と石神遺跡を結ぶ遺構 通路SX1620、水時計遺構から北へまっすぐ延びる木樋Eと小銅管を埋設した掘形SD277、その抜取り溝SD1595、おなじく北北西に延びる木樋Hを埋設した掘形SD1625とその抜取り溝SD297がある。

SX1620は、SA600の西の柱3間分を幅約7.5mの通路としたもの。木樋と小銅管を埋設した掘形SD277は約12m分を検出し、水時計中心部から50m以上延びていることを確認した。その抜取溝SD1595には大量の焼土が含まれており、SX1610やSA600が焼失した後に木樋などが抜き取られたことを示している。なお、水落遺跡の第5次調査区の所見では、外寸法で約30cmの幅をもつ木樋Eと、小銅管を包む10cm角の木樋は、心々距離で約50cmの間隔を保ち併設されているが、今回の観察結果では一方の抜き取り痕跡しか認められず、どちらかが水落遺跡の第5次調査区と今回の調査区との間で東西いずれかの方向に曲がっていると推定される。いずれとも決しがたいが、断面観察の結果では、木樋Eが北へ延びている可能性が高い。

木樋Hを埋設した掘形SD1625は約17m分を検出し、木樋Gとの接続点から36m以上延びる。これもSX1610が焼失した後に木樋を抜き取っている。

3. 石神遺跡に属す遺構 東西大垣SA600・1600の北に広がる石敷1590・1645・1655、SA1600と柱列SX1610にとりつき通路SX1620の西を画す南北塀SA1640、SA1600の約5m北を西へ流れる東西石組溝SD1650、調査区の北辺に沿って検出した東西方向の柱列SX1610・1670・1655がある。

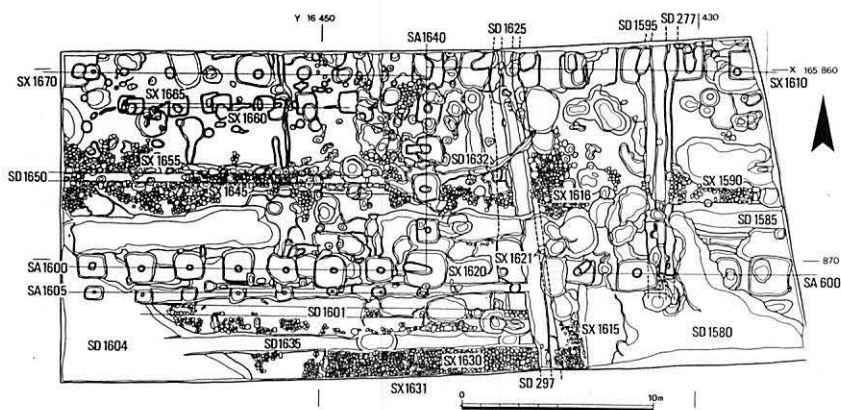
SX1590はかなり損なわれているが、SA600とSX1610の間は、全面にわたって石敷で舗装していたとみられる。SX1645・1655もSX1590と同じ大きさの川原石を敷きつめたもので、SD1650にむかって緩やかに傾斜し、SA1600とSX1670の間の雨水を排水する。

SA1640は5間分を検出し、柱間寸法は2.1m等間。SD1650は溝幅約40cmで、両側にひとかかえほどの玉石を立て側石とする。東端の構造が不明であるが、SA1640付近の石敷の残存状況からすると、全体が浅くくぼみ、周囲の雨水を集めてSD1650に排水していたと推定される。

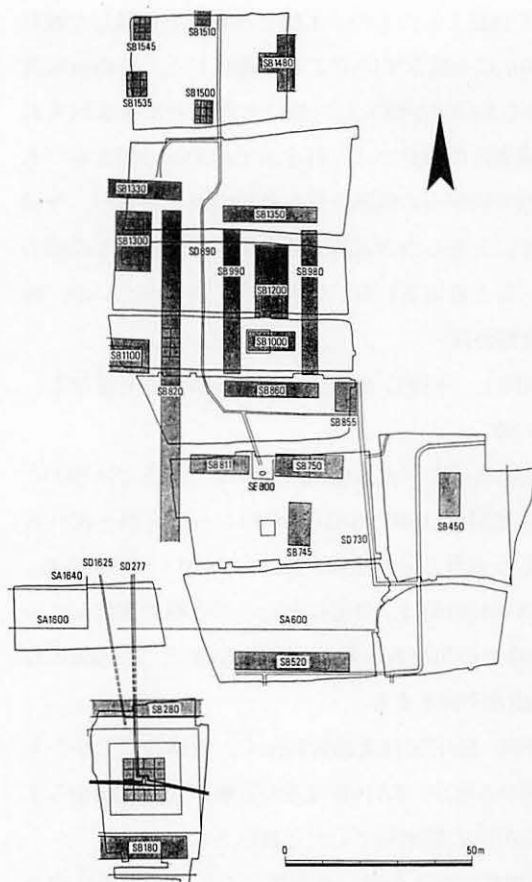
柱列SX1610・1670は、一連の東西棟建物の南側柱になるのか、東西塀になるのか調査区内の所見だけでは判断しがたい。しかし、SA1640を境に東と西では柱筋がわずかに揃わず、柱抜き穴の形や柱間寸法も異なることから別の構造物であった可能性が高い。ただし、いずれの柱抜き穴にも焼土が充満しており、同時に焼失した同時期の遺構と考えられる。SX1610の柱間寸法はほぼ2.6mで割りつけられるが、東から3間目が3.4mと広い。SX1670の柱間寸法は若干のばらつきがあ

るが、ほぼ2.3mである。

柱列SX1665は2間分を検出した。柱間寸法は東から約3.5m、約4.3mである。廃絶の時期はSX1670と同時期



石神遺跡第10次調査遺構図 (1 : 400)



石神遺跡 A-3 期主要遺構配置図 (1:2,000)

付け加えられた可能性も考えられよう。その場合、SA1605はA期の遺構となり、これまでのB期の遺構配置については再考が必要となる。SX1660は、5間分(2.3m等間)を検出したのみであるが、あるいは東西棟建物の南側柱列となる可能性も残る。

〔C期〕 B期の遺構がすべて取り壊され、小規模な建物や井戸が作られた時期。今回は、大量の土師器や須恵器を含む大小の土坑や斜行溝 SD1632を検出したにとどまる。

まとめ 石神遺跡の南北の規模は東西大垣 SA600から北へ160m以上におよぶことが知られていたが、今回、東西の規模が140m以上になることが明らかとなった。A-3期の遺構は、この中に5つほどの空間としてまとめられる。

SA600の北には、石敷きを中心とした空間がひろがる。井戸 SE800から北へ延びる石組溝の東には、4棟の建物で囲まれた狭長な東区画がある。一方、石組溝の西にはより広大な西区画の存在が解明されつつある。さらに、この北には、石組溝の東に特異な平面形をもつ建物を中心とした区画があり、西には総柱建物が数棟建ち並んでいたようである。このうち、東区画はきわめてコンパクトにまとめられた配置をもち、重要な役割を果たした施設のひとつと推定される。一方、

と推定されるが、断ち割り調査の結果では、柱掘形が掘られた時期はSX1670よりわずかに遅れる。その基壇築成に伴い建てられた付属的な施設と考えられる。

〔B期〕 A期の遺構が取り壊され、配置の異なる建物群が建設された時期。今回は、SA1600の南約1.2mにある東西塀 SA1605を7間分と、柱列 SX1660を検出した。SA1605は、柱間寸法と造営方位はSA1600と一致し、柱位置もほぼ正確に揃う。このSA1605は、第3次調査で検出した東西塀 SA560の西延長部とみられるが、通路 SX1620部分で柱穴は見いだされなかった。第3次調査区では、柱掘形はSA600の基壇上面から掘り込み、一部でSA600の柱掘形を壊し、基壇もかさ上げして南縁の化粧石も据えなおしているという所見から、A期の大垣の位置を南にずらし、B期もその位置をほぼ踏襲したものと考えられてきた。しかし、柱間寸法と柱位置がSA1600と揃い、通路 SX1620部分にこの塀が続かないことを重視すれば、SA1605はSA1600と一体の構造をもち、一時期遅れて

西区画では、2棟の四面廂建物が検出されており、東区画より大規模かつ中核的な施設であった可能性が高い。今回検出した柱列 SX1610・1670は、この西区画の北を画す建物 SB1330に対応した南限施設となる可能性も考えられよう。その場合、西区画の南北の規模は110m近くに及び、東西の規模は42m以上となる。また、今回の調査では、石神遺跡と水落遺跡が、SA600で完全に隔てられた別の空間として機能していたのではなく、通路 SX1620によって一体の空間として利用され、水を利用した施設が西区画の中心部に延びていることも確認された。来年度以降の調査で、西区画の建物配置と、水を利用した施設の解明が期待される。

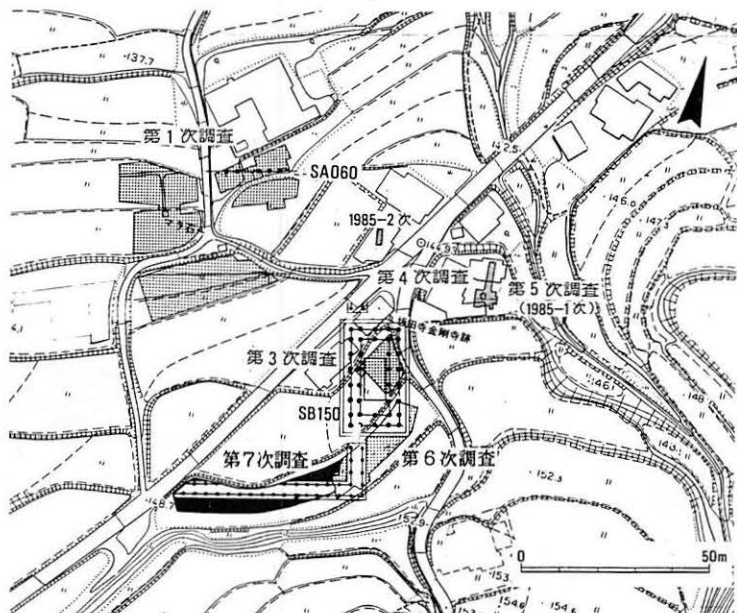
2. 坂田寺跡第7次調査

県環境整備事業に伴う遺構確認調査の第2年次に当る。前回は、第3次調査で確認した西面する仏堂の南東隅と単廂の廻廊を検出し、両者が8世紀後半に造営された檜皮葺きの建物であることなどを明らかにした。今回検出した遺構には、南面廻廊とその内外の雨落溝、内庭の石敷のほか、石組施設・溝・炉や土砂崩れの跡などがある。

南面廻廊 SC180 廻廊は梁間1間で、柱間寸法は桁行・梁間とも3m(10尺)である。新たに15間分を検出し、昨年検出した2間を合わせると17間以上の規模になる。基壇は、花崗岩の岩盤を削って平坦面を形成し、両側の雨落溝を削り込むことで成形する。その上面に礎石を据え、さらに基壇土にあたる砂質土を薄く積む。廻廊の南側柱列には、各礎石間の中央に角柱列 SX190がある。柱は一辺20cm、深さ25cmの掘形を掘って据える。柱根が遺存した例では一辺12cm×7.5cmの断面長方形で、短辺を桁行方向に揃える。類例は山田寺にあるが、柱掘形は大型で柱間寸法にばらつきがある。この角柱列の機能については腰壁束の一種である可能性が高いが、今後類例を待って検討したい。

廻廊南雨落溝 SD181

SD181は岩盤を幅1.5～2.0m、深さ0.2～0.3mほど削り、溝の南外方は幅約0.5mほどの平坦面をもつだけで急傾斜で丘陵にいたる。雨落溝は、当初粘土層を溝底とし、石で護岸していた(SD181A)が、その後、溝は基壇縁石と護岸の石の据え付け掘形を含め掘り直され(SD181B)、10世紀後半代に埋没したとみられる。



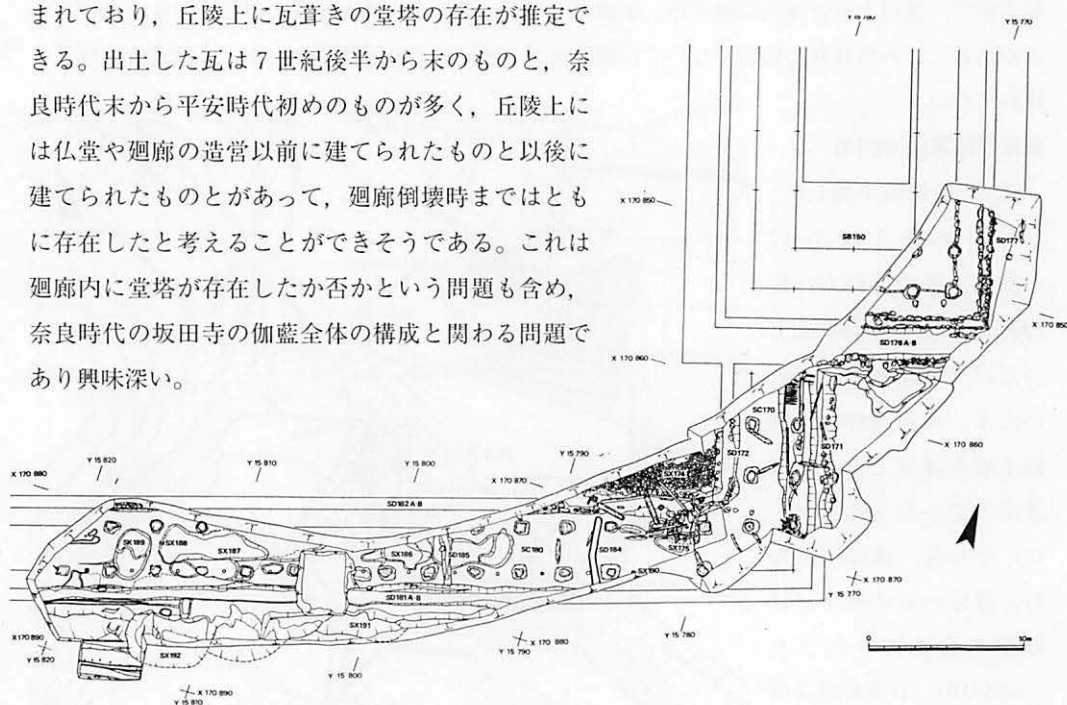
坂田寺調査位置図 (1:2,000)

廻廊北雨落溝 SD182 SD182は調査区の東と西で検出したが、両者で様相が異なる。東では第6次調査区での所見と同じく、建築部材を含む黒灰色有機質土層の下で、幅1.6m、深さ0.3mの素掘り溝を検出した。西では当初幅0.8mの石組溝であったことを確認した。したがって廻廊の当初の基壇幅は5.4mと推定される。北雨落溝の内側は人頭大の川原石で舗装する(SX174)。

その他の遺構 石組施設 SX175, 南北溝 SD184・185, 土坑状のくぼみ SX186・187, 炬跡 SX188, 土砂崩れ跡 SX191・192がある。SX175は、第6次調査で既に検出しているが、廻廊の入隅から2間目の内側礎石列上に大型の石材を長方形に組んだものである。底は岩盤を削りだしたままで敷石などは無く、改修後の北雨落溝底とほぼ同じ高さである。

遺物 建築部材(柱・頭貫・虹梁・卷斗・檜皮)・瓦・土器・施釉陶器・鉄釘などがある。瓦以外は極めて少量で、建築部材を除けば、外側から流入した遺物がほとんどである。土器には土師器・須恵器・黒色土器があり、土師器では奈良時代前半から平安時代にかけての灯明皿が多い。施釉陶器には緑釉と、型押し of 文様をもつ椀形の内外面に釉薬を施す唐三彩がある。

まとめ 今回の調査で、南面廻廊の規模が隅から17間以上であることが確認された。周辺の地形から廻廊は19間以上には延びないと考えられ、その東西幅は51m以上57m未満となる。廻廊の南北幅は58m程度と推定されており、廻廊で囲まれた空間は、ほぼ正方形に近く、その規模は一般的な国分寺とほぼ等しい。なお、廻廊南の土砂崩れによって形成された高まりには多量の瓦や基壇土と思われる山土のほか、土製小仏像、金箔を貼った漆製品の断片やガラス玉が含まれており、丘陵上に瓦葺きの堂塔の存在が推定できる。出土した瓦は7世紀後半から末のものと、奈良時代末から平安時代初めのものが多く、丘陵上には仏堂や廻廊の造営以前に建てられたものと以後に建てられたものとがあって、廻廊倒壊時まではともに存在したと考えることができそうである。これは廻廊内に堂塔が存在したか否かという問題も含め、奈良時代の坂田寺の伽藍全体の構成と関わる問題であり興味深い。



3. 飛鳥池遺跡の調査（飛鳥寺1991－1次調査）

飛鳥寺の南東に位置する飛鳥池の埋め立てに伴い、明日香村教育委員会と合同で実施した調査。検出した遺構は、掘立柱建物8棟、掘立柱塀4条、炉跡10基以上、石敷4、石組溝2条、井戸2基、素掘り溝、土坑などである。遺構は、平安時代、藤原宮期、7世紀中頃にわかれる。

平安時代の遺構 谷（SD809）に沿った素掘り溝 SD771がある。調査区南西辺では幅0.4m、深さ0.45mあり、谷筋に沿って北東に延びる。

藤原宮期の遺構 整地土の上面で建物、塀、炉跡、井戸、溝、土坑を検出した。これらは金属製品などの製作に関連する遺構であり、谷筋（SD809・810）に堆積した炭層と粗炭層から、金属製品（鉄・銅）・ガラス製品・木製品の製作に関わる遺物が大量に出土した。

掘立柱建物は、ほぼ方眼方位にそった SB748・754・757と、北で東にふれる SB767・785・805・808がある。SB748は柱間1.8m（6尺）。SB754は梁間、桁行とも2.4m（8尺）等間の南北棟であろう。SB757は東西の柱間2.4m（8尺）、南北の柱間3.0m（10尺）。この2棟は重複しており、SB757が古い。北で東にふれる建物は調査区の北半にある。北辺に位置する SB805は2間×3間の建物で、斜面を削って平坦面を作り、山側に2条の排水溝 SD803と SD804を巡らす。梁間2.2m等間、桁行は総長6mを1.8m（6尺）2間と2.4m（8尺）に3分する。SB808はこの SB805北東妻に重複する建物。梁間総長は4.4mで同じ。桁行の柱間は1.8m（6尺）。2棟は側柱筋をほぼ揃える。新旧は不明。SB785は SB805の南東にあり、規模は2間×2間か。桁行2.7m（9尺）等間、梁間約3.9mである。南西の妻付近に炉跡 SX788・791がある。SB781はその南西にある小規模な掘立柱建物で、梁間2.4m、桁行3.2mである。北西妻柱筋は SB805の側柱筋にほぼ揃うので、2棟は一体のものであろう。建物内部に炉跡 SX774～776・787がある。これらの建物は内部やその近辺に鍛冶炉跡があるので工房と考えられる。調査区西辺にある SB767は2間×3間で梁間1.8m（6尺）、桁行は2間が1.65m（5.5尺）、1間が0.9m（3尺）である。

掘立柱列 SA748・751は調査区の南西部にあり、SA748は柱間1.8m（6尺）の2間、SA751は3.0m（10尺）である。近接して炉跡 SX750があるので建物の一部か。塀 SA753は大型の土坑 SK770や炉跡群の南にあり、4間で柱間は3.0m（10尺）等間、柱掘形は長辺が1mをこえ大型である。柱筋は SA751や SB785の側柱筋とほぼ並ぶ。この塀の南には廃棄物の堆積層ともいえる炭層が広がるので、作業区域の南東を限る塀と考えられる。SA756・759は調査区の西端にあって互いにほぼ直交する2条の掘立柱塀である。SA756は柱間1.5m（5尺）で3間分を、SA759は柱間1.8m（6尺）で3間分を検出した。

鍛冶炉は直径35～40cm、深さ10cm 前後の円形の炉跡が10基以上ある。これらは地面を掘り下げただけのものと、穴を掘ったあと内側に粘土を張りつけたものがある。SX788は6つの炉が重なり、古いものの内側に土を入れて粘土を貼り、かさ上げしながらつくり替えている。最下層の SX7886は東西約77cm、南北50cm 以上ある。SX774～776は検出面では3基の炉が位置をずらしながら重複していたが、その下層にも少なくとも2基の炉跡があり、近接した狭い範囲で何度も炉をつくり

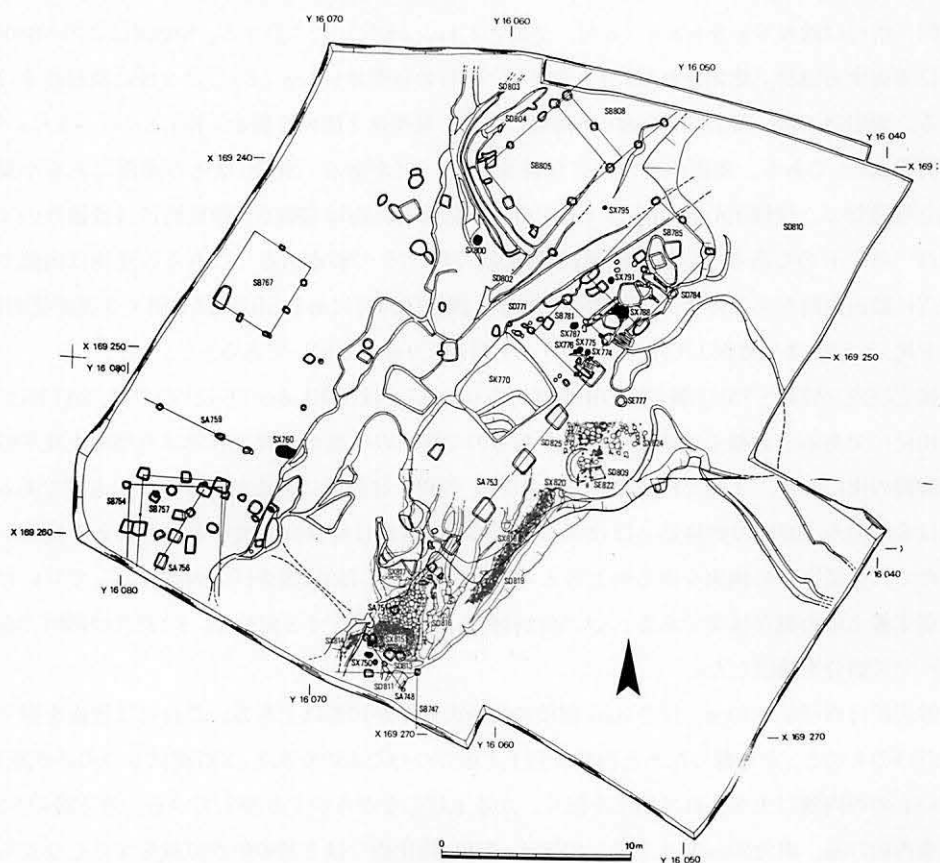
替えている。これらの炉跡を、先にのべた掘立柱建物 SB781 と SB785 が覆っていたと考えられる。SB805 の南西にある SX800 は直径約 60cm あり、内部に厚さ 10cm ほど炭が充満する。炭の中からは銅釘や銅切り屑・銅塊が出土した。このほか、調査区南端に小型の鍛冶炉 SX750 があり、西部にやや大型の炉跡 SX760 がある。SX760 は幅約 50cm、残存する長さ約 1 m であるが、他の鍛冶炉のように内部に炭の堆積はない。

井戸 SE777 は曲物側板を枠とする。枠は一段のみで、掘形径 60cm、曲物径 45cm である。

建物 SB785 や堀 SA753 の南から東にかけては、多量の炭・灰を交えた遺物包含層があった。この層は、調査区南西から北東に延びる浅い谷 SD809 と、南東から北西に延びるやや深い谷 SD810 に堆積した産業廃棄物の堆積層であり、鉄・銅滓、鞆羽口、鋳型、埴塼、鉄製品、銅製品、銅切り屑、須恵器、土師器、瓦、木器、木簡、砥石などが出土した。

7 世紀中頃の遺構 藤原宮期の遺構が形成された整地土層、あるいは同時期の炭層の下層で検出した。石敷遺構 4 箇所、井戸 1 基、石組溝 2 条などがある。

石敷 SX815 は、南側約半分にコ字形に列石を巡らせ、その中には拳大の石を、北側には人頭大の石を敷きつめる。石敷の北辺には列石 SX817 があり、コ字形列石の 2 辺とはほぼ平行する。石敷



飛鳥池遺跡調査遺構図 (1:400)

の南側の溝 SD813は素掘りで、これを挟んだ南側は一段高いテラスになる。東側の溝 SD816は、元来両側を石で護岸してあったようだ。SX815をはずれると護岸の痕跡はなく、素掘りの溝となる。SD813と SD816は SX815の南東隅でつながり、ここにさらに南上段にある素掘りの南北溝 SD811が注ぎ込む。SX814は SX815の西側で一段低い所にある小石を敷いた石敷。SX818は、SX815と北西の井戸まわりの SX823をつなぐように作られた舗道状の石敷で、南端が約 1 m 高い。南東側は、岩盤を削り込んで急な斜面となる。この斜面と石敷面との間には素掘り溝 SD819がある。SD819は下で石組 SX820につながり、SX820は斜めに石敷 SX818を横切って石敷 SX823の西側にある石組溝 SD825につながる。SX823は、井戸 SE822周囲に設けられた石敷。南側の岩盤を削り込んで平坦面を作り、その南端に井戸 SE822を掘る。西側を石組溝 SD825が囲み、東側にも弧状に並ぶ石列 SX824が残るので、南側を除き周囲に石組溝を巡らせていた可能性が強い。

SE822は SX823の南端にある横板組の井戸である。一辺約 80cm、深さ約 1.6m で、横板は北 3 段、東と南は 4 段、西は 5 段が遺存する。最下段だけ内側に横棧をかませる。このほか、藤原宮期の建物 SB805の下層でこの時期の SD809の堆積層（灰色シルト層・灰緑色粘砂層）を掘り下げた。土器・瓦・木器・木簡が出土し、少量の韃の羽口や漆壺が含まれる。井戸 SE822からはほぼ北北西に向かって谷地形が延びていたものと推定できる。

遺物 瓦磚類、木簡・木製品、金属・金属製品、土器・土製品、石・石製品がある。そのうち工房関係の遺物は木・金・土・石にまたがる多種多様な内容をもつ。

土器には土師器と須恵器のほかに少量の緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器などがある。灰緑色粘砂から出土した 7 世紀前半代のものと、炭層・粗炭層から出土した 7 世紀後半から 8 世紀初めの土器が多く、6 世紀初めと平安時代の土器が少量ある。炭層を中心に出土した約 800 点以上の漆付着土器には、パレットとして使用した杯皿類と容器として使用した壺甕類がある。

土製品には、鑄造・鍛造・ガラスに関わる韃羽口、埴塼、とりべ、鑄型、炉壁のほかに土馬、円面硯、転用硯、土製円盤がある。韃羽口はおもに炭層から出土し、総数 520 点以上ある。ガラス埴塼は平城京内や石川県寺家遺跡など 10 遺跡に出土例があるが、いずれも点数は少なく、蓋は今回初めて出土した。ガラス関連の遺物にはほかに小玉の鑄型 3 点、原材料と思われる方鉛鉱や良質の石英塊がある。小玉の鑄型は円または楕円形の粘土板の一方の面に直径 5 mm の小孔を多数並べたもので、小孔の中央に 1 mm 未満の細孔が貫通する。細孔にはガラスが残り、下面の細孔部分周辺は他よりも熱による変色が強い。類例は天理市布留遺跡、橿原市四条大田中遺跡等 7 遺跡で出土しているが、埴塼とともに出土したのは今回が初めてである。とりべは椀形の厚手のものと、土師器のつくりと同様の薄手のものがあり、いずれも片口に作り銅湯玉やカラミが付着する。鑄型のほとんどは製品の種類が明らかでない破片であるが、仏像型と海獣葡萄鏡型が注目される。

石製品では大量の砥石のほか、石製鑄型などが少量ある。砥石は 2.5cm 大から 50cm 大までの多様な大きさのものが約 990 点ある。大型・中型の「据え砥」は少なく、三角形・角形・多角柱形などに使い込んだ小型の「持ち砥」が多い。

金属製品には銅と鉄があり、製品・未製品・屑など約200点のほかに原料や鋳滓がある。鉄製品には釘・鋸・刀子・鋏・鑿・はばきなどがあり、刀子や鋏の未製品が目立つ。銅製品では人形、ピンセット、円頭釘、針のほか魚子を打った板、金銅製の板、透かし彫りの切り抜き屑片、たがねで削りとったときに生じる螺旋形の屑など具体的な製作の工程が推測できる。

木器は粗炭層から多量に出土した。金属器工房で用いた様（ためし：注文見本）、漆工房用の道具、木工具のほか、祭祀具・遊戯具・服飾具・容器等がある。様には鋏・鎌・刀子・釘・円金具、座金具、壺金具がある。木簡は、炭層及び粗炭層から103点が出土した。

瓦埴類は整理箱にして60箱ほど出土した。内訳は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、垂木先瓦、面戸瓦、熨斗瓦、鴟尾、埴、土管などであるが、いずれも飛鳥寺所用のものと考えられる。

まとめ 今回の調査で、飛鳥寺近くの谷地形を利用し、7世紀中頃（漆・金属）と藤原宮期に営まれた工房の存在が明らかとなった。宮期にはほぼ同じ場所で、金属（銅・鉄）・ガラス・木漆器が生産されていたことも判明し、鉄製品の製作に木製の様を使うこともこの時期に遡ることが知られた。この工房の性格については、原料などに評制下で税として集められた物品を使用する一方、「石川宮」や「大仏皇子宮」などの宮の物品も用いていることから、「官営工房」と断定するには至らなかった。しかし、飛鳥の宮都のごく近くで金属製品などの生産遺跡を発見できたことが最大の収穫であり、今後、飛鳥地域の土地利用や当時の金属器生産の実態を考える上で重要な資料を提供したといえよう。

（大脇 潔）

調査地区	遺跡・調査回数	調査期間	面積	備考
6AJF - S	藤原宮第66次	91. 8. 6~91. 9. 2	315m ²	宮西方官衙
6AJG - T・U	藤原宮第68次	91. 9. 6~92. 2. 6	1,460m ²	宮西方官衙
6AMH - J	藤原宮第66-1次	91. 4. 1~91. 8. 3	1,200m ²	左京十一條三坊南西坪(雷丘北方遺跡)
6AJF - Q	藤原宮第66-2次	91. 4. 4~91. 4. 5	30m ²	宮西方官衙
6AJF - Q	藤原宮第66-3次	91. 4. 4~91. 4. 11	85m ²	宮西方官衙
6AJF - Q	藤原宮第66-4次	91. 4. 8~91. 4. 11	70m ²	宮西方官衙
6AJQ - E	藤原宮第66-5次	91. 6. 17~91. 7. 5	204m ²	右京二条二坊北西・南西坪
6AMR - R	藤原宮第66-6次	91. 7. 30~91. 8. 29	166m ²	右京十條四坊南東坪
6AJH - P	藤原宮第66-7次	91. 8. 1~91. 8. 5	60m ²	宮西方官衙
6AJP - M	藤原宮第66-8次	91. 8. 23~91. 9. 5	192m ²	右京二条一坊南東坪
6AJM - B	藤原宮第66-9次	91. 9. 17~91. 9. 21	40m ²	宮南面大垣
6AJC - M	藤原宮第66-10次	91. 11. 11~91. 11. 14	75m ²	左京六条三坊北西坪
6AJK - C	藤原宮第66-11次	91. 11. 19~91. 12. 16	221m ²	宮西面大垣
6AJH - S	藤原宮第66-12次	92. 1. 8~92. 2. 19	350m ²	右京七条一坊北西坪
6AMH - J・Q・R・S	藤原宮第66-13次	91. 12. 2~92. 4. 14	745m ²	左京十一條三坊南西坪(雷丘北方遺跡)
6AJD - P	藤原宮第66-14次	92. 2. 5~92. 2. 6	14.5m ²	宮南東隅
6AJG - T	藤原宮第66-15次	92. 2. 12~92. 4. 13	800m ²	宮西方官衙
6AJH - P	藤原宮第66-16次	92. 2. 24~92. 2. 25	70m ²	宮西方官衙
6AJN - N	藤原宮第66-17次	92. 3. 23~92. 3. 31	60m ²	左京二条三坊南西・南東坪
6AMD - U	石神遺跡第10次	91. 7. 8~91. 12. 17	670m ²	飛鳥浄御原宮推定地
5BST - A	坂田寺第7次	91. 9. 2~91. 12. 17	330m ²	南面廻廊
5BAS - W	飛鳥寺1991-1次	91. 4. 5~91. 8. 12	1,190m ²	飛鳥池遺跡
6AMC - N	山田道第4次	91. 7. 11~91. 7. 31	209m ²	山田道推定地
6BMY - C	本葉師寺1991-1次	92. 3. 10~92. 3. 27	22m ²	金堂南・東辺

1991年度 飛鳥藤原宮跡発掘調査部調査地一覧